

『ゆれる』

2006年／日本／西川美和監督作品

タイトルは「ゆれる」、コラムも「ゆれる」

会員 大菅 俊志 (60期)



『ゆれる』 販売元：バンダイビジュアル

修習生になって、またその後弁護士になってという実務に触れ始めたころは、法廷シーン等司法に関連する場面の描写が特に気になったものであり、当時は、映画やテレビドラマを見ると（もっとも、テレビドラマはあまり見ないが）、このシーンは現実にはありえないであるとか、こんな描写は現実とかけ離れているだとか、いちいち気になったものである（もちろん、今でもやはり気になる）。

日本の刑事司法の問題点をあぶり出した周防正行監督の「それでもボクはやってない」は、私が修習生であったときに公開された作品であり、これを見た当時、その正確な描写に非常に感銘を受けた（検察修習のときの講話の中で、東京地検のどこかの部の部長から、同作品には無視できないところがあるとの話があったことが印象に残っている）。今回私が選んだ「ゆれる」は、幼なじみの女性の転落死に関して、殺人の疑いをかけられ刑事被告人となった香川照之演じる兄の疑いを晴らそうとオダギリジョー演じる弟が奔走するという流れで話が進んでいくため、中盤から後半にかけて法廷の場面が多く出てくるが、これがなかなか正確で、監督はよく勉強されて、裁判傍聴にも何度も足を運ばれたのだろうと想像できる。

もちろん、私がこの映画に魅力を感じたのは、

法廷シーンの描写だけではない。よく練られ最後まで見る者を引き込むストーリー、風貌（？）から性格までまるで異なる兄弟を演じるメインキャストの2人の演技（特に、一見朴訥で人がよさそうでありながら、どこか影のある兄を演じる香川照之の演技がいい）、2人の幼なじみを演じる真木よう子、弁護士役の蟹江敬三、検察官役の木村祐一など脇を固めるキャスト陣もみな存分に個性を発揮していると思う。特に、木村祐一の検察官は、意外といっは失礼だが、個人的にかなりはまっていると思う。

ところで、このコラムは、「心に残る映画」というテーマだが、今回執筆するにあたり、ジュゼッペ・トルナトーレ監督の「題名のない子守唄」（ある裕福な一家の家政婦として潜り込んだある謎を抱える女性の行動とその目的についてサスペンス調で描いたもので、ストーリーもさることながら、随所で流れるエンニオ・モリコーネの音楽がまたいい）について書こうかどうかと相当迷った。しかし、この「ゆれる」私の気持ちに重ね合わせて、最終的には「ゆれる」を選んでみた。と、ここまで書いて読み返してみたが、本文も自分の心情を反映したかのようにゆれにゆれており、全くとりとめのない内容になってしまったと反省し、今回の私のコラムを締めようと思う。